

大豆

吸実性カメムシ類

発生の動向

- 1 令和6年は、8月下旬以降に発生が見られ、主な寄生種は、ホソヘリカメムシだった（図1）。
- 2 子実調査では、発生圃場率は93.5%（平年87.8%）と平年よりやや高かった。また、令和2年度以降、夏期が高温で経過しているため、発生程度が高い圃場が増加傾向にある（図2）。
- 3 吸実性カメムシ類に加害された場合、着莢期～莢伸長期は落莢、莢伸長期～子実肥大初期は不稔、子実肥大期～収穫期は稔実被害粒（不整粒、変形粒）となる（図3、4）。

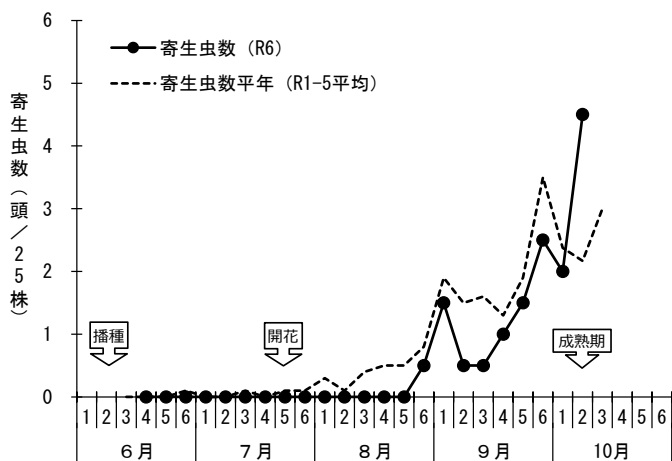


図1 基準圃場（北上市）における吸実性カメムシ類の発生消長
※ 平年値：令和1～5年の平均

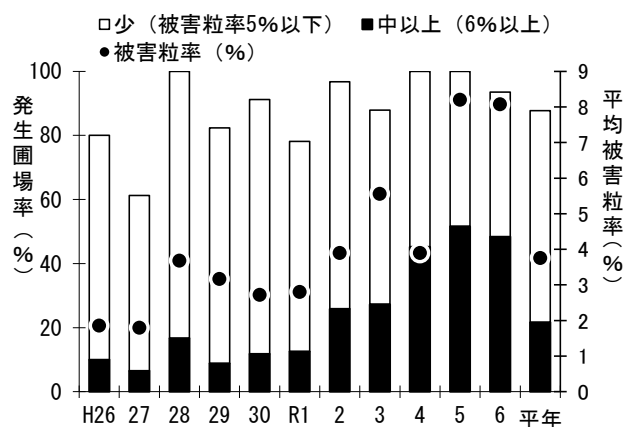


図2 子実調査における吸実性カメムシ類の発生圃場率の年次推移
※ 平均被害粒率：発生圃場の平均値

防除対策

- 1 開花後期～子実肥大中期に1～2回、薬剤防除を実施する。
- 2 防除の際は、大豆の莢に薬剤が十分かかるように散布する。



図3 被害莢



図4 被害粒（成熟期）

※ 画像の引用先：いわての農作物病害虫図鑑（I） 稲・畑作物・牧草編 （一社）岩手県植物防疫協会